

全員飲み倒れてしまった後も、徹宵態度乱れず飲み続けていられたのは今は亡き塩田博士と松木先生のお二人であった。酒を好まれ酒をよく飲まれたお二方の先生である。

その後折にふれ酒の飲み方を教はり一諸に飲んだ思い出は教尽きない。

先生は小生にとっては身延山専門学校時代の恩師である。天台四教儀と布教法を習学した。

肝心の布教についてもっと多く習得すべきであったと悔まれる。

(本学教授)

## 生涯を子弟の教育に

上 田 本 昌

身延山にとってながい間の念願であった大学の新校舎が、ようやく完成し、明日十月一日はその落成式をおこなうという前日、同窓会の有志大会が、新装なった二階の教室で開かれた。

この日、学頭でありまた同窓会の会長でもあった松木本興先生はやや不自由になられた足を、さして気にもとめられず、元気なお姿をみせられ、全国各地から登山してこられた同窓の各師や、教え子の方々と歓談され、心から新校舎の完成を喜んでおられた。

松木先生は学頭になられる以前から、なんとかして大学の校舎を新しく立派な設備の整ったものにしようと、なが

い聞考えてこられ機会あることに全国の同窓生や、父兄のもとを訪れ、校舎建設の話をして歩かれた。それだけに現在の本山当局が、藤井日静学長猥下を始めとして、理事長の望月日雄先生等々校舎建設に本腰を入れるときまってきた、松木先生はさながらわがことのような悦びようであった。

松木先生は身延で生れ身延で育ち、そして身延の教学に生き、子弟の教育に生涯を捧げられた生粋の身延人であつていけば、身延の「生え抜き」であつた。

先生は身延大学林が身延小檀林と改称された翌年（明治三十年）の五月に誕生され、苦学されながら大正八年に今の身延山大学の前身である祖山学院高等部を卒業され、ただちに時の法主猥下であつた日慈上人から内地留学生に命ぜられ、天台宗大学に進まれた。ここでは日蓮教学と最も密接な関係をもつ天台教学について、その奥義を学ばれ大正十二年卒業と同時に母校祖山学院の助教授となられた。

それ以来今日にいたるまで、実に四十有五年の間、身延の大学で教鞭をとり続けてこられたのである。

この間、祖山学院は昭和十六年に身延山専門学校となり、先生は終戦の翌年に推されて教頭となられた。昭和二十五年に学制改革で現在の身延山短期大学となったのであるが、二十八年に学頭となられ、また天台学の教授としてのかたわら、総本山の執事として布教部長や教学部長をも歴任され、多忙な日々をおくられたのである。

特に深見日円法主について、全国を布教して巡り、戦後の身延山を復興するために尽力されたことは周知の通りである。

先生が若い頃、胸を悪くされたことは聞いていたが、学頭としてまた執事としての激務に在って、常に本山に起居され、平素は病むことをほとんど知らないほどの壮健さであつた。

ご自坊は紙の町として知られている市川大門町の長生寺であるがこのほうは専ら奥様とたった一人の息子さんである善興師にまかせて、ひたすら学校と本山に詰めておられたのである。

先生は名譽とか政治的野心とかいうものとは、全く縁の遠い存在であった。ただ学問を愛し、その学ばれたことをただちに布教の面で活かして行かれた。学者といっても机上の理論家ではなく、布教師といっても実のない講釈師とは異なり、先生の今日の学問は明日の布教で、広く人々に活きた教えとなって弘められてゆかれたのである。先生の学問は常に先生自身の布教によって活かされていたところに、最も大きな意義があったのだと思われる。

また先生は学問を愛されると同よう、お酒もなかなかかひとかたならぬ愛し方をなされたようである。しかも先生のお酒は決して乱れるところがなく、いつも端然としてたしなんでおられた。どちらかといえばにぎやかに酒宴を張るというのみ方よりも、独り書をひもときながら興のおもむくところ酒と交る、といったタイプであったように思う。昨年の夏頃から先生はにわかにながら元気がなくなってこられたように見えたのだが、お聞きしても身体が不調であることなど、あまり人前で口になさらず、ただ視力と足の不自由をもらされる程度であった。きっとそのうちにまたお元気になるであろうと、だれしもがそう思っていた。

しかし十一月に教学大会が身延山で開かれた頃、先生は気が張っておられたのか、病気を押して出席され、会長として開会から閉会の辞にいたるまで、無事に責任を果された。今にして思えば、このとき述べられた閉会の辞が、先生最後のお別かれの言葉となったわけである。

国立甲府病院に入院なされて間もなく病状は急激に悪化していった。先生が生涯の念願とされた新校舎もできあがり、同窓会も教学大会も無事終ったという安心感からか、ベッドの上で静かに七十一年間の歳月をふりかえりつつ、

大任を果し終えた安らぎの中に入寂せられた。

十二月十九日未明、ご遷化を悼むがごとく、甲斐の山里には一面に白雪が、しきりと降り積っていた。

入寂の師に粉雪のしきりなる

正久目

〔日蓮宗新聞43年1月10日号より転載〕

（本学助教授）